

原爆文学研究会報

第五二二号

原爆文学研究会 二〇一七年八月

宮崎と原爆

宮崎市に住んで三年目の夏を迎えました。普段、研究以外で原爆のことを見聞きする機会はほとんどありません。そのぶん地元の新開やチャンドで取り上げられると目がとまります。少し前、宮崎霊園にある宮崎県原爆死没者慰霊碑の前で慰霊祭が行われたことを地元紙で知り、碑を見に行きました。碑の近くには長崎の被爆二世の柿の木が青々と茂っていました。長崎といえば、宮崎大宮高校の学校新聞「望洋新聞」（一九四七年一月）に、永井隆が部員のために書いた短い文章が掲載されているようです（「宮崎日日新聞」二〇一七年八月一三日）。

この夏は県立図書館で佐々木禎子と折り鶴を紹介する展示があり、足を運びました。観覧無料で、ポスターパネルのほかにリピートで流されている短編映画『つるにのつてーとも子の冒険』（一九八九）も前半だけです。観ることができました。私がパネルや映画を観ているとき他の見学者はいませんが、これはたまたまかもしれません。

禎子に関する映画では『折鶴 2015』も最近になつて観ました。ロサンゼルス在住の曾原三友紀監督が宮崎県出身で、今年七月に地元都城の小学校で上映会を行ったという新聞記事を見たからです。物語はアメリカに引越して間もない少年が真珠湾攻撃の生存者や禎子の折り鶴などとの出会い、なじめなかつた周囲と打ち解けていくというものです。禎子はもちろん、真珠湾攻撃の生存者も実在のモデルがいて、禎子の甥の佐々木祐滋も本人役で登場しますが、映画はフィクションとして構成されています。少年の家族は母親だけで父親は登場しません。その理由はわからず、またなぜ少年家族が渡米したのかも作中では説明されません。それを気にしながら観ていると、少年の夢に現れたサダコの回想の中で、

父繁雄が千羽鶴を折ると願いが叶うかもしれないと語る場面になりました。禎子を描いた物語は多かれ少なかれ脚色が施されるので、この映画で父親に千羽鶴のことを語らせるのもその一つだと思われれます。この映画では生存者のリチャード、サダコの兄雅弘、クラス担任のリー先生などが、少年が新しい一步を踏み出すための手助けをしています。回想中のサダコの父もまた、サダコに折り鶴を折るきっかけを与えたことで、少年と折り鶴が出会う機会を作ったといえます。この映画には様々な父親代わりの男性たちが登場するのだと思いました。

映画の後半、少年がクラスメイトと折つた千羽鶴をホワイトハウスに送ると、最後に大統領（やはり男性です）から返事が届きます。映画が完成したのはオバマの広島訪問の前ですが、奇しくもロサンゼルス小学校での上映はオバマの広島訪問の日と重なったそうです。オバマといえば、自作の折り鶴を広島平和記念資料館に寄贈したことが話題になりました。長崎市に贈られたオバマの折り鶴は、今年の夏、島根県出雲市で被爆資料とともに展示されていて、今年度中には福井県や宮崎県にも巡回すること。禎子のパネルで足を止めなかつた人も、オバマの折り鶴では立ち止まってみるかもしれません。

ところで宮崎市には一年前から歌人の俵万智が住んでいます。子の進学や歌人の縁などで石垣島から宮崎へ引越してきたことをやはり地元紙掲載のエッセーで知りました。俵は石垣島の前は仙台にいて、東日本大震災の余震と原発事故から逃れるために島に移住しています。震災直後の歌を収め今夏文庫化された『オレがマリオ』を宮崎市内の書店で購入しました。宮崎から東北へ、震災と原発事故へ、そして原爆へつながる線について、とりとめもなく考えています。

（楠田剛士）

第五二回 原爆文学研究会報告



二〇一六年五月二〇日(土)―
二一日(日)に第五二回研究会を開催
しました。

一日目は原爆の凶丸木美術館との共
催で、本橋成一監督の映画『ナージャ
の村』と映像報告「ベラルーシ再訪
2017」+アフタートークが開催されま
した。チェルノブイリ原発事故で汚染
されたベラルーシに暮らす人々の姿を
美しい映像で綴る『ナージャの村』は
鮮やかな印象を観る者に残しますが、
ほとんど人のいない現在の村の様子を
捉えた最新報告は村に暮らすことの困
難さを思い知らされるのに十分なも
でした。

アフタートークでは、柿木伸之氏か
らスヴェトラーナ・アレクシエーヴィ
チの『チェルノブイリの祈り』の記述
を手がかりに映画に映し出された人々
の当時の暮らしぶりについて問いが投
げかけられ、本橋監督から映画に対す
る思いや人々との交流が語られました。
質疑応答では美しい映像で原発事故
後の暮らしを伝えることの意義深さと
難しさについて質問がありました。



二日目は立教大学池袋キャンパスに
て、三名の研究発表が行われました。
鴨川都美氏の研究発表では取り上げ
られた戯曲の内容や傾向について多く
の質問が寄せられ、原水爆を題材とす
る演劇の特徴についても議論が交わさ
れました。また、今後研究をどのよう
に展開するのかという質問に対しては
発表者からさらなる調査・分析への意
欲が示される真摯な応答がありまし
た。

堀本嘉子氏の研究発表に対しては、
実際に『空き缶』を教室で教えたとき
の生徒の反応についての質問が出され
ましたが、教科書に掲載された作品を
必ずしも授業で扱うことができるわけ
ではないという高校教育現場の現状を
踏まえた説明があり、授業での実践は
今後の課題という応答がなされまし
た。また、原爆以外の戦争体験を扱っ
た国語教材についても議論が交わされ
ました。

加島正浩氏の研究発表に対しては、
キリスト教的想像力に注目した理由が
問われたほか、キリスト教自体の立場
や考え方の多義性についての指摘など
があり、活発な意見交換が行われまし
た。

◇ 研究発表1

原爆と演劇——雑誌『新劇』掲載戯曲を中心に

鳴川 都美

本発表では、はじめに、一九四九年の蓄薇座による「長崎の鐘」（佐々木孝丸脚色）の上演から、三・一一以前までに期間を区切った、資料「主な核関連戯曲上演年譜」をもとに、核を表象した戯曲の変遷を確認した。その上で、一九五〇年代後半から一九六〇年初頭にかけて発表された「原水爆」を題材とした戯曲が、雑誌『新劇』を媒体として発表されたことに着目し、以下についての検討を行った。

原爆を描いた戯曲は、一九五〇年代半ばまでは、「山脈」（木下順二）や「冒した者」（三好十郎）のように直接的な表現を避けた作品が主流であった。原爆や被爆体験を主題とした戯曲が発表されたのは、ビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験で第五福竜丸が被爆したことを契機としており、以降、「原水爆」を描いた戯曲の数多くが初演を迎える。また、これらの「原水爆」を主題とした戯曲は、演劇雑誌のなかでも特に『新劇』に多く発表されたことを明らかにした。

続いて、『新劇』に掲載された戯曲の書き手には、堀田清美や原源一など、自立演劇出身で後に専業となった劇作家が含まれていることに注目した。戦後に登場した自立演劇出身の劇作家たちは、その多くが八田元夫や村山知義ら戦前のプロレタリア演劇運動を牽引した演劇人に指導を受けている。雑誌『テアトロ』への戯曲掲載等、活躍の場を広げていった彼らは、一九五〇年のレッド・パージにより職場を追われ、専業作家に転身する道を選んだ。しかしながら、以前のように職場周辺を題材とした戯曲が書けず、劇作家としての方向性を模索した結果、田中千禾夫や矢代静一ら劇作派の若手劇作家たちが活躍する『新劇』に参加する。原水爆運動が全国的に展開されるなか、『新劇』の劇作家たちは挙って

「原水爆」を描こうとしたが、彼らもその機に乗じて「原水爆」に着手したことを指摘した。

さいごに、堀田清美「島」を取り上げ、初出である『テアトロ』版（一九五五・一）と『新劇』版（一九五七・一〇）との比較を行い、『新劇』版の玲子の原水爆運動に対する不信感から、改作にあたり、主題に慎重な態度をみせる堀田の姿を浮かび上がらせた。

◇ 研究発表2

戦後国語教科書における原爆文学

——林京子『空き缶』における手法と指導方針——

堀本 嘉子

一九四五五年の原爆投下という出来事を私たちはどのようなように知り得たか。その記憶は定かではないが、私にとっては幼少期に関西に住む祖母から頻繁にかかっていた長電話の中で聞かされた被爆体験がその原点に当たる。彼女は長崎原爆の被爆者だった。そして、学校教育の中で出会った原爆に関する言説も私の頭の中には鮮明な記憶として刻まれている。学校教育の中で「原爆」を語り・継承した言説はどのようなものであったか。「原爆」を語り・継承した言説のなかでもとりわけ国語教科書の役割とはなんであったかを問うた。

本発表では林京子『空き缶』を取り上げ、国語教科書における「原爆」の語られ方と指導法の変遷について教師用指導書を手がかりに探った。原爆文学の教科書掲載の始まりである井伏鱒二『黒い雨』にはじまる原爆文学掲載の推移と比較の確認を行い、当時の教科書と指導書の取り上げ方や教材解釈の言説を分析した。

井伏鱒二『黒い雨』を主軸に七〇年代から八〇年代において国語教科書の中では「原爆文学」というカテゴリーが形成され、教材化されてい

くプロセスのなかで「平和教育」を念頭においた言説が生み出された。『空き缶』でも初回掲載時からしばらくはその傾向が見られる。八〇年代を引き継いだ九〇年代では『空き缶』を原爆文学の一作品として迎え入れ、戦争文学との相違点や共通点を探らせていた。しかし、近年の指導書では被爆者自身の中にも時間の経過とともに当事者性のあり方が変わっていくことを指摘した上で、被爆者／非被爆者という分割に意味がないことを押させさせる構成になっている。

「原爆」における言説に限らず、体験／経験の記憶／記録と記録文学における議論は、文学の場において常になされてきた。ここでは、体験／非体験の（「原爆」における領域であれば、非被爆者は「原爆」を語りうるかという）問題から、記憶／記録という「記憶」を記録する可能／不可能性における問題が繰り返し語られてきた。かつて少女だった女たちによって語られる『空き缶』は、一〇代の生徒たちと教壇に立つ教員が共にその問題に対峙しうる教材としてその変容を遂げてきたと言えるだろう。

◇ 研究発表3

原爆から3. 11へ

——キリスト教と現代日本文学——

加島 正浩

東日本大震災を受けて、キリスト教の立場から積極的な発言が行われている。そこにおいては東日本大震災による地震・津波による被害と原発事故をキリスト教の立場からどのように理解し、行動を起こすべきかが中心の議題となっている。また檜尾直樹ほか編『宗教研討話のフロンティア 壁・災禍・平和』（国書刊行会、二〇一五）などには、個々の宗教の枠を越えた宗教者として震災に向き合う必要性が示唆されている。

本発表では同時代のキリスト教や宗教言説を踏まえ、東日本大震災を描く現代文学のなかでもキリスト教的な想像力が用いられる際に他の宗教や信仰が同時に描かれるテクストに注目し、東日本大震災以後に求められる宗教性を考察しようと試みた。

分析においては最初に筒井康隆『聖痕』（新潮社、二〇一三）を取り上げた。まず中心人物である葉月貴夫がキリストや聖書になぞらえて語られることから、キリスト教的想像力が用いられていることを確認し、貴夫が成長するに従い仏教的な想像力が入り込み、最終的にキリスト教の教義と相反するカルト宗教的共同体が形成されてしまうことを指摘した。そしてそこの東日本大震災の被災地へのボランティアもカルト的発想に基づき行われているため、東日本大震災以後に宗教的想像力の混淆がカルト化する危険性を示すものとして『聖痕』を位置づけた。

しかし想像力の混淆には可能性もある。津島佑子『ジャッカ・ドフニ海の記憶の物語』（集英社、二〇一六）は東日本大震災以後の時間とキリシタン迫害が過熱化した近世という二つの時間で構成され、近世においてはアイヌの少女であるチカップが中心人物として描かれる。チカップはアイヌの信仰を断片的に記憶しているのみで、記憶の大半を失っていたが、キリシタンの少年であるジュリアンにキリスト教や聖書の内容を基にチカップの来歴を構築してもらうことで、断片的であった記憶の意味が再生する。不可視化されたアイヌの記憶がキリスト教により可視化され、混淆しながらアイヌの信仰を再生させたものとして『ジャッカ・ドフニ』を位置づけ、テクスト内の東日本大震災以後の時間と関連付けることで震災以後の宗教性の可能性を提示しようと試みた。

彙報

第五二回 原爆文学研究会

○日時 二〇一六年五月二〇日(土)―二一日(日)

【一日目】

○会場 原爆の凶丸木美術館

○本橋成一『ナージャの村』上映

「ベラルーシ再訪2017」上映＋アフタートーク(聞き手) 柿木伸之

原爆の凶丸木美術館見学

【二日目】

○会場 立教大学池袋キャンパス12号館地下第一、第二会議室

○研究発表

発表1 原爆と演劇―雑誌『新劇』掲載戯曲を中心に 鴨川 都美

発表2 戦後国語教科書における原爆文学

―林京子『空き缶』における手法と指導方針― 堀本 嘉子

発表3 原爆から3.11へ

―キリスト教と現代日本文学― 加島 正浩

機関誌「原爆研究文学」第一六号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の一六号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください(今回から投稿宛先が変わりますので、ご注意ください)。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇一七年

九月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付し

ての投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒六五一―二一八七 神戸市西区学園東町九―一

神戸市外国語大学 山本昭宏研究室

編集後記

今年度より会報編集を担当させていただくことになりました。なれな編集作業で校正を出すのが遅くなり、執筆者のみなさまにはご迷惑をおかけいたしました。快くご協力いただいたことに心よりお礼申し上げます。引き続き、どうぞよろしく願います。

次回の第五三回原爆文学研究会は九月一六日(土)、広島市の広島大学東千田未来創生センターにて開催されます。研究発表は市田真理氏「五福竜丸・久保山愛吉さんに寄せられた三〇〇〇通の手紙」、宮川健郎氏「那須正幹と原爆―『原爆』を読む文化事典」・「教育と原爆児童文学」補遺―です。また、島村輝氏と村上陽子による林京子「再びルイへ。」(林京子『谷間 再びルイへ』講談社文芸文庫、二〇一六)の再読が予定されています。会員のみなさまのご参加をお待ちしております。第五四回原爆文学研究会は二月二三日(土)に広島市で開催いたします。(村上陽子)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九―一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>